ヴェイユにおける恩寵と人間
――「注意力」概念の重要性についての考察――

中島和歌子

はじめに

本論文の主たる目的は三つある。第一に、シモーヌ・ヴェイユ（以下ヴェイユと記す）の『カイエ *Cahiers*』を主に考察することにより、彼女の思想において「恩寵 grâce」と人間とがどのような関係にあるのか、ヴェイユの言う恩寵をどのように解釈するのが適切なのかを明らかにすることである。第二に、それを踏まえた上で、ヴェイユ研究において度々取り上げられ、重要とはされていたが、今までそれほど深く考察が行われてこなかった「注意力 attention」概念について、その意義と意味について論ずる。そして最後に、注意力の発現に伴う諸問題を指摘するとともに、注意力の有用性について言及する。

カトリシズムの伝統においては、恩寵は「神 Dieu」より人間に無償で与えられるものとされている。わたしたちは人間であって、当然のことであるが、決して神ではあり得ないにも関わらず、恩寵という概念について語ろうとするとき、われわれは、われわれではないものである神について述べる事を余儀なくされるのだ。

『カイエ』で、ヴェイユはこう書き記している。「森羅万象のうちにおいては、神は不在というあり方でしか存在することができない」（C III 105）。この一節は彼女において

最も特徴的な表現のひとつである。その不在を人が感知するときにヴェイユが重視したものが、カトリックの伝統的諸要素ではなく、遍く人間が持ち合わせている筈の注意力というものであったということの意味には、既成の宗教に関わる諸事象が常に大きな問題であり続ける以上、やはり常に目を向ける必然性があるとわたしは思う。神、恩寵という宗教的な言葉を使いつつも、そこに真に普遍的なものを見ていたヴェイユの言葉は、所謂宗教的な要素からは普段遠く距離を置いた生活を送っている人間でさえ足を踏み入れることができる、否、そのようなこととは関係なく、むしろ誰しもが足を力強く踏み込まねばならない領域の存在の重要性をわたしに教えてくれた。その直観を限りなく確信に近いものにするべく、論を進めていきたいと思う。

第1章　ヴェイユの恩寵論――神と人間――

第1節　ヴェイユの恩寵について

恩寵という言葉に関して、宗教的な発想においてはじめにもたらされるものは、神による人間への見返りを求めない働きかけという伝統的かつ基本的なイメージであり、ヴェイユにおいても決してそれは例外ではない。しかし、恩寵が働くタイミングとその種類においてヴェイユのそれらは、神学的な伝統とは少々趣が異なる。

> 他人の生命と死。自分以外に思考する存在があるということは、幸福である。「不可欠な恩寵 grâce essentielle」。ある人間存在の死を願うということ、それはこの恩寵を拒否することである。(C I 335)
>
> 恩寵は、充たす。だが恩寵は、それを受け入れるための「真空 vide」があるところにしか入ることができず、しかも、この真空をつくるのもまた恩寵である。(C II 286)

第二の引用における恩寵は、それぞれ「真空をつくる恩寵」と、「真空を充たす恩寵」と呼べる。真空という言葉はヴェイユにおいて「耐え難く、不可能で、ありえないということ。そしてわれわれはそれを避けられない。この耐え難いという感覚、それが真空の感覚なのである」(C II 152) とされており、人間であるがゆえに決定的に背負わざるを得ない苦悩、言わば生きることと不可分の感覚である。「不可欠な」「真空をつくる恩寵」、すなわち、いのちをつくる恩寵があるという強い前提をまず確認しておきた

い。

しかしながら、恩寵が神からもたらされるとするならば人間の命も神からもたらされると、そのまま当てはめて理解する前に、ヴェイユの言う神が、よく言われるような全知全能の神、というものでは決してあり得ないことを見ておきたい。

全能の神を思い描くこと、それは自分自身を間違った神的状態において表わすことである。(C II 394)
無力な神を愛すること。(C II 395)

仮に、「わたしはあらんとしてある者である」(『出エジプト記』関根正雄訳 13)に代表されるような全能の神が存在するならば、それは、他の何ものも必要とせずに存在しているということである。が、それのみで完全である存在などではないわたしは、この身はあらゆるものに背負われ、支えられていると切実に感じている以上、完全なるものの理解を概念だけに留め、心からそれを体感するものではない。

さて、この世界をヴェイユに倣って簡単に、神が不在である森羅万象と呼ぶことも容易であるだろうが、それを宗教的な、創造された世界として解釈するだけではなく、不完全な世界と言い換えるとしても、それは決して間違いにはならない筈である。

それがどのようなものであろうとも、各々の出来事というものは、神にそっと触れることなのである。各々の事実、そして生じる物事は、それが幸せであろうと不幸であろうと、個人的な観点からは興味のないものであろうと、そのひとつひとつは神からの愛撫なのである。(中略)神は、物質が神を受け入れることのできるあらゆる程度において、残らず、十全に見出されるものであるが、それをわれわれは抽象的に知ってはいるものの、魂すべてにおいては知らないのである。(C II 447)

つまり、この世の不完全なものとは、神がそれぞれこのフィールドでとるかたちであり、あらゆるものごとは不完全なものとしてしか存在し得ないということだ。

ここで、先程提示した、人間のいのちが神によってもたらされるものである、ということの考察に戻りたい。だれかに命を与える、「真空をつくる恩寵」をもたらすことと

は、単に生物学的に見れば遺伝的な親のなすことであるが、彼らも単独で存在しているわけではもちろんなく、周囲のあらゆる事物、環境などと、目には見えないが繋がることによってようやく、いわば存在させてもらっている、ある意味受動的な存在なのである。したがって、ヴェイユにおける第一の恩寵とでも言うべき、「真空をつくる恩寵」とは、あるひとつのいのちを生み出してくる環境すべてを範囲とすることができるだろう。いのちはあくまでも自ら生まれるのではなく、自分の手の及ばないなにものかによって生み出されるにすぎないもの、ただの「被造物 créature」である。そのため、何もキリスト教に限ることなく、人間が等しく被造性という性格を備えていることも自然明らかとなろう。

第2節　真　空

次に、「真空を充たす恩寵」へと進んでいきたいと思う。しばしば真空《vide》という単語は、虚空、すき間、空白とも訳され、何にせよ余地があるということである。ここで、先に触れた完全と不完全について思い起こすなら、余地があるというのは不完全であるということであり、すなわち被造物たる人間の属性に対応する。ヴェイユは「人間の悲惨 misère humaine」という表現を多用しているが、あらゆるものに依存し、根本的な問題に対した際に自分だけではどうすることもできないというそうした状態や性質、それらは常に、人間が被造物として生まれたときから、人間の内部、外部を問わず、静かに巣食っているものである。だが、そのように真空が慢性的な痛みであっても、そもそもそれを知らなければ、それを抱えている当人でさえそれであると気づかない。大抵の場合、どこからともなく湧いてくる不快感と不安感に焦燥をかきたてられ、人間はやり場のない衝動を持て余しているだけである。

では、それをどのようにして知ることができるのだろうか。先程「真空を充たす恩寵」という表現を引用したが、これは恩寵が勝手に充たすことを意味しない。充たす前には、まず充たされる真空というものを知らなければならない。真空の得体の知れぬ恐ろしさは、訳も分からず全身が怖気立ってきてしまうような性格を持ち、そしてひとたび自覚してしまえば、たちまちある種の絶望に変容する。自らは根本的に被造物という性格をもつ存在なのであると自覚すれば、自己、「私 je」という言わば後天的なものは、極めて小さな力しか持たなくなってしまうからだ。だが、見なかったことにするだけではその恐ろしさの正体は分から

ないままだ。たとえそこで目を凝らしても、目が暗さに最初は慣れない。だが、徐々に慣れてくるにつれ、それが何なのかは極めて少しずつではあれ明確になる。ただしそれは、明確になるのであって、真空そのものの性質が明るくなるのではない。

ヴェイユは「真空があるならば、そこには落ち込み、あるいは恩寵への移行がある」(C II 151) と述べているが、真空を見ようとしないことが前者であり、目を向けそれを把握しようと試みることが後者に対応する。そしてこの、真空を認識しようとすること、すなわち恩寵への移行のために有用であることとして注目されるべきであるのが、ヴェイユの言う「注意力」なのである。

第3節　真空から恩寵へ――注意力――

(前略) 神について思考したいと真に願うならば、恩寵によって助けられることで次第に注意力を働かせるようになり、思考の対象というものも次第に神に近付いていくだろう。(C III 215)

実在を把握するところのものとは注意力であり、従って、より思考が注意力を働かせることができるのなら、思考の「対象 bien」も存在性でいっぱいになる。(後略) (C III 228)

ヴェイユにおける注意力とは端的に、まなざし、目を向けること、のように解釈される語であり、なにものかに目を向ける働き、そして注意力を向けた先のものを認めること、「あるがままの真実として受け入れる」(AD 93) こと、という趣旨も含む。「恩寵によって助けられることで次第に注意力を働かせる」、つまり、最初に人間が注意力を備えるのは当然いのちを受けたことによるのであり、人間が、その極めて初期の段階にある低次の注意力を行使することによって、恩寵はその都度働きかけ、注意力の段階を徐々に向上させていく。これが、この世界のシステムに対するヴェイユが持つ基本的なイメージであろう。とはいえ、これは最も単純化した場合であり、その対象が真空となれば話は別である。途方もない、不可解だという感情、根本的な欠落。真空の性質も真空に他ならない、畢竟充たされていないがゆえに、それについて理解することは多くの場合、困難を極めることになる。

注意力とは、それを向けた対象を認識し、受け入れることでもあると前述したが、そうなると、真空から恩寵へ移行する為に必要なのは、真空を認識し、受け入れること以

外のなにものでもない。真空を認識し、人間であるが故の困難、悲惨さを認める過程において、人間が目を向けた先に真空を見出した場合、自分はこうではない、自分はこんなことはしない、自分はこんなことはすまい、こうはならない、そうした感情を伴うものであるが、一歩進んでそうした自分というものがいかに無力であるかをひとたび自覚することが必要とされている。すると、人は自らにもそういった可能性があり、けっして他人事ではないという恐ろしさに目覚めるのである。とはいえ、自分も人間である、被造物であるという意識が発生し、愕然としながらもその事実を受け入れようとしたとき、人はこの世の基本性質としての真空に対して注意力をもって向かい合い、ひいては恩寵へ移行する一歩を踏み出したことになる。真空を受け入れるにつれ、人間は無となり、被造物たる自らの特質をわきまえ、世界とその真空性の理解を進めることになるだろう。

次章では恩寵に対応する注意力そのものに関する諸考察を行いたい。

第2章　ヴェイユの注意力と人間のすがた

第1節　ヴェイユの注意力に関して
――上昇と下降　意志との比較における――

ところで「注意」という言葉を聞いて何を連想するかと問われた場合、何らかの形で喚起されるものとしての注意を思いつく人が多いのではないかと推察される。気持ちが弛んでいる状況で「注意しなさい」と声をかけられ、慌てて姿勢を正すという状況は、誰でも経験があるものだろう。こうした消極的、瞬間的に生じるイメージに加え、注意力散漫という言葉に代表されるような、ネガティブ且つ達成できないというイメージは拭いがたいが、ヴェイユのいう注意力とは、外界から喚起されて行うという性格を持つのでもなく、警戒すべき一瞬に瞬間的に発揮されるようなものでもない。自ら継続して行うべき注意力というものなのだ。

では、そうして注意力を人間が発揮するということを、ヴェイユはどのような動きとして見ていたのだろうか。注意力について考える際、ヴェイユは「魂のうちにあって、梃子とは注意力であり、また祈りである。しかし、社会においてはそうだろうか？」(C II 315)、「自らを低くするこ

と、それは、精神的な重力に関して言うならば、上昇することである。精神的な重力は、われわれを高みへと降ろすのだ」(C II 319) といったように、上昇と下降という運動をイメージすると同時に、しばしば「梃子 levier」の動きを想定している。また、関連概念として『カイエ』、また「神への愛のために学業を善用することについての省察 *Réflexions sur le bon usage des études scholaires en vue de l'Amour de Dieu*」には、「謙虚 humilité」という言葉が幾度か登場しており、ヴェイユのそれは、わたしが無であることを知り、そして、その無であることそのものを欲すること、という意味で用いられている。「注意力とは、思考を中止することであり、思考を待機させておき、思考を空にすることで対象へと浸透しうるようにすること」(AD 92) であるのならば、謙虚であることと注意力を発揮することは殆ど同義となるのであり、いったん自らがへりくだり下降することによって、注意力を発揮する側は、対象を「あるがままの真実として受け入れる」(AD 93) ことができるのだ。その結果、自らを下降させた注意力は、その下降そのものの恩寵を、また注意力を向ける対象からは、対象それ自体の恩寵を得る。これこそヴェイユが言う、下降することによって上昇させることなのである。

次に、恩寵の対概念として、伝統的に用いられてきた自由意志ではなく、注意力を対応させていることについて、「意志 volonté」と注意力の比較の観点から言及したい。神学論争において、恩寵を根源とする自由意志は、律法に関係した善悪の選択の問題に直結したものとされ、加えて、神の予知、及び救霊予定などと密接に結びつく性格をもつものであった。だが、ヴェイユの恩寵論の特徴のひとつは、受洗と信仰の継続を不可欠とするキリスト教の教会内に限定された恩寵ではなく、洗礼を必要としない恩寵が働く構造を構築したことにある。自身常にキリスト教の態度を取り入れてきたと語るヴェイユは、しかし洗礼を受けないまま、自由意志によって善を選択することではなく注意力の行使の継続による、いわば教会外に留まった救霊を提案した。この点については本章3節でも述べるが、では、ヴェイユは意志をどのようなものと考えたのか。『神を待ちのぞむ *Attente de Dieu*』に顕著だが、彼女が意志という言葉を用いる際、それを筋肉的なものとしてみなすことに注目したい。

生徒達に向かい、「さあ皆さん、注意して下さい」と言うと、彼らが眉をしかめ、呼吸を抑えて、筋肉を収縮

するのをわたしは見るわけである。二分後に、それではあなたたちは何に対して注意をしていたのかと訊ねてみるなら、彼らは返答することができない。なぜなら彼らは何ものにも対して注意力を働かせていなかったから。彼らは、筋肉を収縮させただけなのであった。(AD 90)

ここで言われている筋肉の収縮こそヴェイユの想定する意志に相当するものであることを理解するために、また、ヴェイユにおいて意志と注意力がどのような関係にあるかを知るためにふさわしい例として、「紙の上に文字の形を書くときに、それが文字の形をあらわすことではなく、観念を表明することを目指しているのと同じことである」(AD 89) という一節を引用しておこう。大切なのは、ヴェイユにおいて意志は必ずしも排除されていないということだ。この例の場合、筋肉を収縮させて文字を書くのは意志であるが、それに先立つ注意力が、その文字によって構成されるものを把握していることが条件となる。また、目を向けるということにしても、ある人が、たとえ最初に筋肉だけで反射的になにか対象を視界に入れたときでさえ、それを注視する段になって働くのは、紛れもなく魂の中にある注意力なのである。

ヴェイユが注意力と呼んでいるものをどのようにとらえていたかは、『カイエ』並びに、「神への愛のために学業を善用することについての省察」から詳細に読みとれる。学業というものがこの論文のテーマであるが、注意力のより低い部分を発達させるために学校教育がある筈なのに、それは今日誰にも知られていない、とヴェイユは嘆いているのだ。これは、まさに注意されていない、ということであろう。本来それは年若い段階で訓練され、あらゆる行動の基礎に据えられるべき土台である筈なのにも関わらず、彼女の注意力には、それができていない者が多く認められたのであろう。言うなれば、その結果、その必然としてこの論文が執筆されたのだ。ヴェイユにとっては、注意力について注意を喚起する論文を作成せねばならないという状況は、おそらく少なからず不本意であったと推察される。

さて、今日の日本において、何か不祥事のあった集団の責任者が「心よりお詫び申し上げます」、「大変遺憾であります」と筋肉を痙攣させてこわばった表情で言い、カメラに向かって頭を下げているが、むしろその過失や問題そのものに目を向けて欲しいと思わせられるのは、残念ながら稀なことではない。こうした場合、ヴェイユの言う「過ち

を改善し、直すということは、注意力によってなされるべきであって、意志によってなされるべきではない」(C II 371)という言葉の痛切さが、切なくもより実感できるのである。

第2節　マルブランシュとメルロ＝ポンティ

本節では、注意力という語について、ヴェイユ以外の思想家において見出される例を考察する。『重力と恩寵』の解題においてギュスターヴ・ティボンが指摘した通り、マルブランシュにおいてはヴェイユと極めて似通った注意力観が見出され、『形而上学と宗教についての対話』では「私のすべての方法は、私を照らし、かつ導いていくものへと向かってゆく入念な注意に帰着する」(OE II 951) として、人間のとるべき態度として注意力の重要性が述べられている。マルブランシュにおいて注意力とは、「我々の認識の機会原因」(OE II 920) であり、すなわち、神において見ることの機会原因となっているわけである。見ること、それは極めて日常的な言葉であるが、その活動の中に神を据えるという方針、そのおおもとに注意力が土台としてあることがわかる。また『形而上学的かつキリスト教的考察』には、「それを願うに従って、光が精神の中でひろがってゆくのを私は感じるのであるが、そのためのある努力というものが、私が注意力と呼ぶものなのである」(OE II 197) とあるが、ここで言われている、光が精神の中で広がるための注意力という表現は、注意力によってその都度恩寵を得るというヴェイユの立場と類似点が見受けられることも指摘しておきたい。

一方、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』には、経験論と主知主義それぞれの立場の注意作用というものについて述べられている箇所があり、「経験論に欠けていたものは、対象とそれによって引き起こされる注意作用との内的連関であった。ところが主知主義に欠けているものは、思惟を始める機会の偶然性である」(『知覚の現象学 1』竹内芳郎訳 67)とあるが、これはヴェイユにおいては、どちらも恩寵によって解決されるものである。後者は「真空をつくる恩寵」、前者は「内的連関」(『知覚の現象学 1』65)をもたらす循環のもととなる「真空を充たす恩寵」として解釈され得るだろう。

また、以下のような表現にもヴェイユとの類比が存在するだろう。「双方とも、学びつつある意識というものを把えないという点で、この輪郭づけられた無知、このまだ「空虚」だがしかしすでに決定された指向――これこそがま

さに注意ということなのだが――を尊重しないという点で、相一致しているわけである」(『知覚の現象学 1』67)。

ここではマルブランシュとメルロ=ポンティという二人の思想家におけるattentionというものに目を向けたが、注意というのはいわば人間にとっての基本的な姿勢を考える上でのことなのであり、その点ヴェイユと彼らの間に際立った隔たりはないように思われる。が、あまりにそれが基本的過ぎるために、目立った取り上げられ方をされていないのではないかと危惧せずにはいられない。

第3節　ヴェイユの宗教、信仰そして祈りについて
――それらと注意力との関連――

本節では、ヴェイユが注意力について語る時に付随して用いられる「祈り prière」、「信仰 croyance」などの宗教的概念がどのように解釈されるべきなのか、ヴェイユの宗教論とでも言うべきものについて総合的に考察すると共に、注意力概念の重要性について言及したい。既に指摘した通り、彼女の言う注意力の発現において特定の宗教は必要とされず、先の「神への愛のために学業を善用することについての省察」は、カトリックの学生向けの論文という体裁を取っているにも関わらず、注意力を働かせて真理を求めるのならば、「学問研究は既成のどんな宗教への信仰を持たなくても、その霊的な効果は十全にもつことができる」(AD 97)と結語しており、キリスト教徒であるか否かは関係なく、注意力というものの根本的な重要性を説いている点は注目に値するだろう。

また、ヴェイユにとっては、注意力の行使そのものが宗教なのであるとも言える。「神への暗黙的な愛の諸形態 *Formes de l'Amour implicite de Dieu*」においては、「公衆に、公式に、宗教とはある注視から成り立っており、そこに存するものであるということが認められねばならないのだ。宗教がそのほかのものであろうと強く望むかぎり、宗教は教会の中に引きこもってしまうことを、あるいは、それが見出された場所であらゆる点においてすべてのものを息苦しくさせることを免れないのである」(AD 197)と述べられており、ここから、一般的に言われている宗教とヴェイユのそれとがかなり違っていることが判明するわけである。一方で、ヴェイユの宗教とは、こうあってほしいという彼女の理想の形であるとも言える。「教会の中に引きこもってしまう」という表現は、現実に宗教と呼ばれるものに対してヴェイユが持つ像であり、それではいけないというのが彼女の趣旨である。この引用の少し前の部分に

は、「信仰と、信仰の社会的な模造品とを見分けることは、殆ど不可能である。（中略）しかし、それは殆ど不可能ではあるけれども、まるで不可能なのではない」（AD 195）という言葉もあり、彼女が真にこうあれかしと願っている信仰は、世間を見渡してみて極めて見出されにくいということが暗示されている。ヴェイユはまた、信仰について、「学問研究と信仰。信仰とは、純粋な形態のうちにある注意力に他ならず、学業とは注意力の訓練をその本質としているので、学校での各々の実践は、精神的な生の屈折であるはずである」（C III 315）と述べており、この部分は特に「神への暗黙的な愛の諸形態」の趣旨を簡潔かつ的確に表していると言える。

さて、次に祈りという言葉の考察へと移っていきたい。マルブランシュの『道徳論』に、「理性がわれわれを照らすことによってわれわれが得た自然の祈りというものが精神の注意なのである」（OE II 462）という一節があるが、ヴェイユにおいても同様に、祈りと注意力には密接な関係がある。「注意力、その最も高い段階の注意力とは、祈りと同じものである」（C II 297）とされているのをはじめとして、これらふたつは、しばしばまとまった形で言い表されている。

注意力以外のなにものでもない注意力とは、祈りである。（C III 228）

超自然的な愛と祈りは、注意力の最も高い形態以外のなにものでもない。（C III 435）

絶え間のない内的な祈りのほかに、善と悪を選抜できるような基準というものはない。それを中断しないところの人間においては、あらゆることが許されている。が、中断をするならば、あらゆることは許されない。（C III 208）

このように、注意力と祈りは組み合わさって出現してくるべき概念であり、注意力が純粋になったものが信仰だとするならば、それが最も高次な段階に到達したものを、彼女が祈りと呼ぶことに何ら不自然さはない。本節ではここまで、宗教、信仰、祈りという三つの語についてヴェイユの考えを辿ってきたが、いずれも注意力と深く結びついたものであり、既成の宗教に関連するというよりはむしろ、宗教性、宗教的なあり方との関係において解釈されるべきであろう。宗教的なものというのは誰をも排さず、むしろ人間すべてを内包している。「アナテマ・シット anathema sit」などという言葉は使われる余地がなく、異端というも

のもそこには存在しない。しかし逆に考えると、誰もが例外なく注意力を働かせることが求められているということでもある。そうなると最早、逃げ込むべき場所は地上にはないのだ。ヴェイユが思い描く宗教は、おそらくどの時代にも必要とされ、だからこそ、また同時に、どの時代においてもその本質的な厳しさゆえに拒まれてきたもどかしさを含んでいるのだろう。時間と時代がもはや注意力を向けなくなった目に見えぬことへの注意、これはかけがえのない高潔なものである。「キリスト教の最重要の真理のうちひとつは、見ることによってそれが救いとなるということなのだが、今日皆それを正しく評価していないのである」(AD 188)、「キリスト教は「普遍的 catholique」であるのですから、例外なくすべての神の思し召しをその内に含まなくてはなりません。従って教会もそれは同様なのです。しかし、私の目には、キリスト教が律法的には普遍でありますが、事実それが普遍的でないように思われます。たくさんのもの、わたしが愛し、見捨てることができないたくさんのもの、神がそれを愛するたくさんのものが教会の外にあるのです。なぜなら、教会の外でなければそれらは存在し得ないからなのです」(AD 53) と綴った一人のキリスト者が、自らが生きた時代とそれまでのキリスト教、教会のあり方を見て、自らの考える宗教というものをより適切に表明できるはずだと焦れったい思いをしているのを、その真空状態における酸欠のような苦しみを、読者もまた感じることになるだろう。

いずれにしても、ヴェイユの考える世界のありかた、人間のすがたというものにおいては、教会の内外を問わず、注意力をどれだけ続けて行使できるかということが大きな問題となっている。「垂直方向はわれわれには禁止されているのだ。しかし、われわれが天を長い時間かけて注視しているならば、神は降りてきて、われわれを連れ出す」(AD 191) のならば、このような注意力の行使にはたして洗礼が必要であろうか。なにかを見つめるためには、人はキリスト教徒でなければならないのだろうか。この点、ヴェイユの恩寵論は実にシンプルであり、宗教というものを突き詰めて考えているからこそ、宗教という壁そのものを取り除くことも一方で可能になっている。

高度な注意力を継続して行使し続け、見つめることによって、そのつど人間は恩寵を得ることになる。そして最終的に「神を待ちのぞむ」状態にまで到る、すなわち、「われわれが注意力の限界に到達したとき、その限界の向こうにあるところのものへの願いとともに、魂の視線を限界に

向けて固定する。（この限界とは洞窟の敷居なのではないか？）残りを行うのは恩寵である。恩寵が洞窟の坂を上らせて、洞窟の外に出させる」（C III 228）とヴェイユが言う状態に到達するのだ。法（律法）を遵守することによって神の意志を行うのではなく、注意力を働かせることによって、必然的に善のほうへと落ちて行く（ことによって精神的に上昇する）こと。それが、ヴェイユが想う、こうあるべきという人間のすがたなのである。

第3章　現状と改善のために

第1節　注意力に付随する諸問題

ここまでヴェイユの思想を辿り、その注意力概念の重要性について明らかにすることを試みてきたが、その際、注意力観の明部に特に注目して歩んできており、これまでの引用文の多くは、あくまでも彼女の思い描いていた理想の形についての言及であるということを忘れてはならない。注意力を具体的に行使する場合には、諸々の問題点がある（それ以前に、注意力自体を働かせることができない、また、意識して注意力を働かそうとしないという状況も少なからずあり、それが今日最も大きな問題と言えるかもしれないが）。

第一に、肥大し続ける苦しみから目を逸らしたいと本質的に欲求する人間の注意力が、適切な形で対象に向かうことができるのかどうかという問題がある。注意力に太陽光の如き均質さを求めたヴェイユは、現実に生じていた注意力のむらを認めていたのだろう。第二に、常に対象に注意力を向けている状態を継続できるかということが挙げられる。「人間には、注意力が成長し、伸びてゆくことに任せるだけの忍耐力を持っていない」（C III 204）とヴェイユは嘆いた。人間が死の瞬間まで注意力を行使し続けるということは、彼女自身の生涯そのものを見ても極めて難しいものであるとわかる。ヴェイユは第二次世界大戦のさなかの一九四三年、十分に食事を採ることをしないでイギリスのアシュフォードで没したとされているが、彼女は当時の世界を支配する真空状態に堪えられなかった、と解釈するのが妥当であろう。ブランショは *L'entretien infini* 第2章第4節でヴェイユの注意力について論じているのだが、そこで、必ずしも自分がこうありたいと思う通りに注意力を発揮できずにいた彼女の生の分析を試み、高次の注意力行使に伴って生じるべき不動性をヴェイユに感じるというより、彼女はむしろ動揺しており、苦しみ続けていたのでは

ないか、という印象を記している。そうした迷いと苦難のうちに、自身の思想を自ら達成することが非常に困難な中で、それでも生き、息を引き取ったヴェイユ自身は、正しく注意力を体現しようとしたと言うに値するだろう。だが、壮絶とも言えるその生涯は、注意力の継続的な行使の難しさを改めて教えるものでもある。

注意力の問題として最後に、注意力を適切に発揮させて何か対象を見つめ続けるとき、その相手が同様のことを行う保障がないことを挙げる。現実問題として当然、注意力が世界中で常に淀みなく発揮され、循環しているわけではなく、注意力を向けないということに起因する種類の真空があるのだ。が、被造物の世界において、そうした現象が生じるというのは、真空であり同時に真理なのである。「調和、異なる諸々の事柄を一挙に把握すること」(C III 95) と述べるヴェイユに従うならば、注意力と不注意という、相反するものが共存しているという形でしか、この世においては調和というものを捉えることはできないのだろう。注意力があるところにはまた不注意もあって然りなのである、というのは実に皮肉であるが、人間には分相応という感じがしなくもないのが、苦笑いを誘うところであろう。

第2節　本論のおわりに——目的を達しなくても有用とされる努力について——

しかしながら、救いが全くないのではない。ヴェイユがしばしば述べている中に、「結論には達しなくても、つねに有用とされる努力」(C II 121) というものがある。「既成宗教への信仰の外にあったとしても、真理を把握するのに適切な状態になるようにとの唯一の願いをもってある人間が注意力の努力を働かせるとき、そのつど、その人間は、たとえ目に見える成果をそれが生まなかったとしても、注意力の努力によって獲得した能力をより大きくして身につけるのである」(AD 87) ことをヴェイユは指摘しており、「注意力の努力が、何年もの間、実を結ばずに無駄であるようなあらわれのなかにしか留まらないとしても、ある日、その注意力の努力と正確に釣り合った光が、魂をいっぱいにあふれさせるのである」(AD 88) と述べていることから、注意力とは人間各人がそれぞれ向き合う個人的な性格の問題でもあるとともに、人間全体の共通の問題でもあることがここで明らかになる。すなわち、真空が人間そのものの悲惨であるのとよく似ているのだが、おそらく人間がひとり生きていくことだけでは、時間、そして空間に押し流され、最高度の注意力を備えるという段階に到達しない

のだ。そして人間は地上から退場する時、名前も顔も知らない、けれど注意力を共有するなにものかに、自らの道を託していくのだろう。真空に引き裂かれながら、ヴェイユがそれでも注意力というものを信じ続けたのは、自らの思考を時空に委ねた証にほかならないのである。だからこそ、彼女は「ある日」に成果が現れるとした。注意力の行使とは、こうしたどこか寂しく孤独な営みであるが、決して空しい行為などではなく、そうした不可視なものへと目を向けるとき、神が不在であるこの世において、おそらく人間はある種の恩寵を得るのだろうとわたしは思う。

繰り返すが、注意力を適切に発揮することがいかに困難かというのは、わたしが指摘する以前に、ヴェイユ本人が痛感していたことである。『カイエ』は、彼女の理想と、そうでないものとしての現実を的確に捉え、本来人に見せるべきものではない、彼女が彼女自身の注意力を働かせた結果としての個人的な覚書であったがために、これほどの有効性を持つのである。

それは、異端に対してではなく、誰か特定の人物への反論でもなく、彼女が見ていた真空そのものに対しての論駁書であり、今なお存在して憚らない真空を通じて、時空を横断して、目を向けるもののほうへと、確かに降りてくるのである。

〔註〕

引用にあたっては、引用文のあとの（　）中で、『　』でタイトルを、次に訳者名を記し、併せてページ数を数字で示した。タイトルは必要に応じて以下の略号を使用、訳者名の記載がない場合は筆者による訳である。

C I：Weil, Simone, *Oeuvres complète # 6-1*, *Cahiers*, Gallimard, 1994

C II：Weil, Simone, *Oeuvres complète # 6-2*, *Cahiers*, Gallimard, 1997

C III：Weil, Simone, *Oeuvres complète # 6-3*, *Cahiers*, Gallimard, 2002

AD：Weil, Simone, *Attente de Dieu*, Fayard, 1966

OE II：Malebranche, *Oeuvres* II, Gallimard, 1992

《付記》

本稿は平成十七年度提出の卒業論文をもとにしているが、その際、ヴェイユに関係する限りで恩寵と自由意志論

争についての思想史的な考察を行った章を省き、その他適宜内容と章を再構成した。